最優秀賞

いただきます

広島県　広島県立呉三津田高等学校二年　上田　莉子

「いただきます」は食前に必ず言う言葉。今年の夏は「命をいただきます」という言葉の意味を熟考する、そんな夏になった。この夏、私は鹿児島県にある「知覧特攻平和会館」と「富屋食堂」に行った。そこで私は特攻隊員の真の姿に感謝と感動を身にしみて感じた。

一九四四年十月、特別攻撃隊、通称特攻が初めて出撃した。特攻。誰もが一度は耳にしたことがあるだろう。いや、むしろあって欲しいものだ。

特攻とは、「自らを肉弾と化す」という戦い方で、命を落とすと分かっていながらも、敵艦に体当たり攻撃をすることを言う。

当時の特攻隊、弱冠十七歳から三十二歳までの戦士たちは、恐怖、惜別を感じるも「必ず死ぬ」を意味する「必死」を誉れとし、最期まで家族、国、恋人を思いながら出撃した。

私が訪れた「富屋食堂」は、かつて特攻の母として特攻隊員に慕われていた「鳥濱トメ」の軍指定食堂だった。鳥濱トメの生涯と、特攻隊員との出会いと別れについて細かく綴られていた。また、「知覧特攻平和会館」には、沖縄戦で戦死された千三十六名の真の姿、遺影、遺品だけでなく、主力戦闘機として使用されていた零戦も展示されていた。

私は、展示物を一文字ずつ丁寧に熟読した。それぞれ手紙の一文字一文字に「この人が生きていたんだ」と命の重みを感じ、ずっと胸が苦しかった。当時の特攻隊員がモノクロの写真で展示されていた。写真に写っていた隊員達の顔は誰一人として曇っていなかった。みんな明日死にに行くとは到底思えなかった。

しかし、それとは裏腹に手紙には、惜別の言葉が綴られているものももちろんあった。「勇気を持って過去を忘れ、将来に新活面を見出せ」と恋人に向けられたものがあった。「もう私はこの世からいなくなるのだから、私に未練を残すな」と、文字だけを見ればそう捉えられる。しかし、本当は、共に生きたかっただろう、忘れないでくれと嘆きたかっただろう、いつまでも自分だけを想っていてくれと言いたかったのだろう。私は綴られたことは全く反対の意味と捉えた。そしてその手紙には最後に、「欲を言わせてくれ、会いたい、話したい、無性に」と。涙が溢れた。必死に声を殺して泣いた。人間の命の儚さ、尊さ、純情な心、深い愛に胸を熱くする他なかった。またある手紙にはこれからの日本が酷い目に遭うかもしれないから行かなければならないという内容のものもあった。未来の日本を思って、たったひとつの命を捧げてくれた。今、私達が当たり前に出来ていることが出来なかった時代があったということが、隊員達直筆の手紙からひしひしと伝わって来た。涙なしには到底読めなかった。悲しみの涙ではなかった。愛する者のために、自分が居ない将来のためにここまで行動を起こせる人がいたことに感動した涙だ。

特攻の出撃日の知らせというのは、前日、早くても二日前だったそうだ。衝撃的な事実であった。いつ死ぬかも分からない状態で、どんな感情を抱いて来る日来る日を過ごしていたのだろう。私だったら、きっと訓練も逃げ出して、常に涙を流しながら嘆き、笑顔なんぞどうやって作るのか分からなくなるだろう。敬服しかない。特攻は、決してただの自爆行為ではない。家族、恋人だけでなく、帝国軍人として未来を、すなわち私達が生きている今をも背負っていた。私が今、学校に行って、勉強して、食べて、寝ることをなんの不安も感じることなく生活できているのは、この人たちが命に変えて、この日

本を守ってくれていたからこそだ。
もちろん特攻隊だけではない。陸軍や海軍として真っ向から敵と戦った人達、なでしこ隊や戦闘機や爆弾の製造に労苦し、隊員を支えてくれた女性達。私達は数え切れない人の命と努力が、今の平和を創り上げてくれたことを肝に銘じなければならないのだ。
私は感動しただけで終わりたくない。戦争経験者が、次々と亡くなり、戦争について語る人が減ってきている世の中から、決してこの事実を水の泡にしてはならない。現に世界で戦争が起きている。いくつもの小さな弱い命が奪われている。
だから私は伝えたい、鹿児島で学んだことを。同じことを繰り返してはいけない、二度と戦争をしてはならないということを。私は特攻隊員達が思い描いた「今」を死守し、広大な空へ散った命を無駄にしたくない。
いただきます。
若き勇士達が捧げてくれた命(いま)を。